

## 北タイ、チェンマイの宗教復興と地域社会の現在

——精霊信仰と霊媒術を巡って——

滋賀医科大学 福浦一男

### 1 目的

この報告の目的は、東南アジア大陸部のタイ王国の北部地方における伝統宗教とその宗教実践の意義を明らかにするとともに、グローバル化と宗教現象の直接的関係を前面に押し出す「宗教現象の近代論」(コマロフやゲシーレ)を乗り越えて、現代の宗教復興現象や宗教復興運動に関する新たな視座を提示することにある。さらにこの報告の目的は、現代世界のなかで周縁化された地域における民衆の宗教実践とその可能性について論じることにある。

### 2 方法

そこで、都市化・消費社会化が進展する北タイ、チェンマイ郡およびその周辺地域において、2001年から2003年までの2年間の長期調査、そしてそれ以降、2015年までのあいだに継続的に短期調査を実施した。主な調査方法は参与観察法と半構造化インタビューを中心とする質的調査である。並行して、日本とタイにおいて文献研究を実施した。先行研究の知見を踏まえながら、収集したデータの分析を行った。

### 3 結果

分析の結果、霊媒たちが集団を形成し、社会変動のなかでパフォーマンスに儀礼的境界を拡張しつつ、チェンマイ地域社会において活発な宗教実践を繰り広げていることが明らかとなった。彼らは、13世紀末にさかのぼる精霊信仰の歴史的重要性を踏まえつつ、セアンス(降霊儀礼)を通して信奉者の日常生活上の悩みや問題の解決に寄与するとともに、チェンマイの守護霊信仰を軸とする数百名規模のインフォーマルな集団を組織し、チェンマイ郡とその周辺地域で年間を通してさまざまな集団儀礼を実践している。さらに、この北タイの事例を通して、いわゆる「宗教現象の近代論」とは異なる宗教実践、すなわち自律性、独自性、多元性、重層性、異種混濁性を特徴とする民衆の宗教実践の存在が明らかとなった。

### 4 結論

以上から、霊媒たちの多彩な儀礼実践は、年間を通してチェンマイの精霊信仰の総体を重層的に形成しているという結論が導き出された。復興されつつあるこの重層的な宗教文化的空間は、多元的な価値を承認し合い、互いの自主性や独立性を重んじるような社会や価値観につながっていくと考えられる。このような状況のなかで、北タイの霊媒たちは、数々の集団儀礼への関与を強めながら、チェンマイ地域社会の儀礼的エイジェントの役割を引き受けつつある。このような儀礼の復興は、実質的には現代世界に対する地域社会の周縁性を相対化し、馴致していくための戦略となる。儀礼復興はローカルな力を生み出すが、その力は文化構築的な性質を色濃く帯びる。儀礼復興がうみだすローカルな価値はあくまでも非本質主義的なものであり、かつ不断に再創造されるのである。

### 文献

福浦一男、2016、『霊媒のいる街——北タイ、チェンマイの宗教復興』春風社。